

1.17 阪神・淡路大震災追悼行事

皆さん、おはようございます。

30 年前の 1995 年 1 月 17 日 火曜日 午前 5 時 46 分 52 秒、淡路島北部を震源地とする国内観測史上初の「震度 7」の揺れを記録する「阪神・淡路大震災」が発生しました。

この地震は死者 6,434 名、行方不明 3 名、負傷者 43,792 名の未曾有の人的被害と、約 63 万棟の全半壊という住家被害をもたらしました。明石市内においても死者 16 名、負傷者 72 名、家屋の全壊 700 棟の被害報告がありました。

本校も 4 号館と体育館に大きな損傷を受け、使用禁止となる状況を招き、その年の卒業式、入学式は明石中央体育館で執り行いました。また、学校行事は常に雨天時対応を考慮しながら、グラウンドや現在のラバーコート等で仮設ステージを組んで、明南祭を実施するなど、氷山の一角にすぎないですが、当時の学校生活に甚大な影響を及ぼしました。

幸いにも生徒の自宅は約 400 棟の全半壊や一部損壊の被害がありましたが、死者等の人的被害はなく、全員無事であったことが本校としては何もよりも喜ばしいことでした。

当時の本校及び生徒の状況や活動については、本校が作成した記録集『大震災を乗り越えて 1996 めいなん 1 年のあゆみ』と体験文集（別冊）『海峡の彼方から』に残されており、現在、本校図書館のカウンターにて紹介しています。

是非、この機会に手に取って一読してください。当時の本校生徒や職員は困難を極める中でも、懸命に復興に向けて力を尽くし、そして、多くのことを感じ、学んだことを現在の私たちに伝えています。

一昨日のテレビ放送「刻み続ける 1995 年 1 月 17 日～あの日現場で起きていたこと～」の中で、当時、人命救助にあたっていた西宮市消防局の中越さんは、自宅や家族のことも気にかけながら、「この震災で一人の命も救えなかった。遺体を引き渡すだけだった。」と自然災害に対する人間の無力さと、「どんなに機材が新しくなっても使うのは生身の人間であり、訓練等はおろそかにせず、真剣に取り組んでほしい。」と常日頃からの備えが大切であることを強く訴えておられ、そのことについて、改めて認識させられました。

皆さんも家具等の転倒防止などの「身の安全の備え」や非常用品の準備及び持ち出しなどの「初期対応の備え」、家庭での役割分担、安否確認の方法、避難方法及び集合場所の確認などの「確かな行動への備え」について、家族や周囲の人たちとこの機会に一度、話し合ってみてください。

阪神・淡路大震災以降、2004 年に新潟県中越地震、2011 年には原発事故を引き起こした東日本大震災、2016 年には熊本地震、そして、昨年 of 能登半島地震など、国内で震度 7 以上を観測した地震が発生しており、それ以下の地震も年中、頻発している状況です。

国は今後、南海トラフ巨大地震が 30 年以内に発生する確率を昨年 1 月時点の「70～80%」から昨日「80%程度」に引き上げました。私たちは、犠牲になった方々やその家族、経験者から多くのことを学び、引き継いできました。これから私たちはそのことを教訓にして、更に防災・減災に努めるよう、対策への訓練や知識だけにとどめず、後世に伝え、より安全・安心な世の中を築いていくことが使命であります。

私たちが地球上で生きている以上、いつどこで何が起こるか分かりません。全く心配のない平穏な日常を送れることが当たり前ではなく、むしろ例外であり、そのことはとても有り難いことだということを決して忘れてはなりません。

このあと、阪神・淡路大震災をはじめ自然災害で犠牲になられた多くの方々のご冥福を祈り、黙祷を捧げることをお願いして、校長の言葉とします。

令和 7 年 1 月 17 日

校長